

福音の少年 外伝

ブリンクマン追跡

「…つま先」マイ・ランというベトナム人の魔女が言った。内側から板を打ち付けた窓から、細い糸のような光がひとすじ、彼女の丸い額に当たっていた。

「…複数の？」ジエームス・プリティッシュはその若い魔女の細い顔を覗き込んで、そう言った。

マイ・ランは、緑色に鈍く光っている携帯用直感発振体から顔をあげて、目の前にいる若き『ウィザード』に、緊張した声で「…複数です」と答えた。

「裸足なのか？」ヤロシクというチェコ人の『メイジ』が、木製のテーブルの上を指でなぞりながら言った。

「裸足よ」マイ・ランはすぐさま答えた。あたりまえではないか。汚れて割れた足の親指が、彼女の脳裏を横切って歩き去ったのだ。

「二階にいないとなると、どこなんだ？」ジエームス・プリティッシュはつぶやいた。

「もう一つ地下室があるんじゃないですかね？」ヤロシクが言った。

「…もう一度降りてみよう」プリティッシュは答えた。

三人の男女は、真つ暗な階段を電子精霊のかすかな灯りを頼りにゆつくりと降りた。精霊は球体となって、プリティッシュの金髪の上の浮かんではいる。それは、十数メートル周囲の動く物体はなんであれ報告するよう命令されていた。

古いコロニアル風の木製の階段がぎしぎし鳴った。

上級魔女のグエン・ティ・マイ・ランは、ふと故郷の父の家を思

い出した。彼女は、一九六四年、ベトナムが平和のうちに完全に独立してからこつち急速に増えた企業家の娘だった。父の家は、趣味の悪いロココ調の豪邸だった。夜になると、むやみに階段と大きなホールが怖かった。この古ぼけた別荘はその豪華な屋敷とはまるで違っているはずなのだが、暗闇は同じだった。ベトナムでも、フロリダでも、暗闇は暗闇だった。

ウィズ・プリティッシュは、あたしの事をどう思っているだろう？ふと、そんな考えが浮かんできた。きっと無口で、おどおどした、無能な魔女だと思っているのだろう。しかし、あの青い目で見られると、なにがなんだかわからなくなるのだ。

恋をしているのだ。米大陸担当の『ウィザード』に。それははっきりしていた。皆の独身の魔女たちは、何人も、ウィズ・プリティッシュにあたりまえのように恋をしていた。めずらしくもない。だが、こうやってお化け屋敷を探検するようにプリティッシュと行動している、胸がどきどきした。

メイジのステパン・ヤロシクが邪魔に思えた。鈍重な感じの大男。

彼がいなければ、などと考えている自分がおもしろかった。

「ステパン、外にいる警部に声をかけてくれ、中に入って捜査を手伝ってくれ、と」一階に着いたとき、ウィズ・プリティッシュが言った。

「ええ」そう答えてヤロシクは、玄関の方向に向かって歩いて行った。

薄暗がりの中で、マイ・ランとプリティッシュが残された。

「あ、あの…マイ・ロード？」マイ・ランは思い切って、プリティッシュに声をかけた。

「なんだい？」

「もう一度…この位置で、もっと本格的な『リーディング』をやってみましょうか？…ちょうど屋敷の中央ですし」マイ・ランは言った。

「ああ、いい考えだね。やってくれ」プリティッシュは答えた。

マイ・ランはうれしかった。北米でもっとも偉い魔法使いが自分の意見を採用してくれたのだ。

「…じゃ、やってみますね…」マイ・ランは携帯用直感発振体^{タリスマン}を目の前にかざして、その鈍い光を見つめた。ウイズ・プリティッシュが見つめる視線を感じた。気になった。集中しなければ！

「…彼らにはあきましたよ、マイ・ロード」ステパン・ヤロシクが突然暗闇の中から現れた。

「…もう」マイ・ランは思わずヤロシクをにらみつけた。

「なんだ？」『リーディング』に入る途中だったのか。…すまない」ヤロシクは若い魔女にそう言うてから、プリティッシュに向き直った。

「どうしたんだ？」

「州警察はこの事件に関与できないんですと…」まったく「ヤロシクは苦々しげに言った。

「なぜ？」マイ・ランは言った。

「…彼女たちには人権はないんだよ」プリティッシュはヤロシクの代わりに答えた。

マイ・ランは息をのんでウイズ・プリティッシュを見つめた。提灯のようにふくらんだ電子精霊^{エアリエル}の放つぼんやりとした光の中で、プリティッシュは険しい表情を浮かべていた。

「百年になるうかというのに、法律の方が追いついていないのさ」プリティッシュは言った。「仕方ない、われわれだけで探そう…。最初からそのつもりで来ればよかった」

「そうですね」ヤロシクは肩をすくめた。

マイ・ランは、では地元の魔法使いに応援を求めてはどうですか、と提案しかけて、思いとどまった。初級の人間が大勢いても、足手まといになるだけなのだ。このわたしは、プリティッシュから「精鋭」だと思われているのだ。

「では、もう一度『リーディング』をやってみます」マイ・ランは、

きつぱりと言った。プリティッシュとステパン・ヤロシクはうなずいた。

マイ・ランは、携帯用直感発振体^{タリスマン}を再び目の前にかざして、集中した。

突然、彼女は、幻視^{ヴァイジョン}の中に入り込んだ。周りに裸体の女たちがいた。幼い子供のように走り回っている。何人いるのだろうか？情報では「複数」となっていた。

「…複数？ 複数どころではない！」

十人…？ いや十人以上だった。十人以上の裸体の女たちが、窓を封印された昼間でも真っ暗な屋敷の中に閉じこめられているのだ。皆、顔に何かを塗りたくっていた。絵の具かもしれない。緑色、紫色、赤。白目だけがぎらぎらと光っている。きーきーと耳障りな悲鳴のような叫びをあげながら、ホールや階段を走り回っているのだ。床は糞尿だらけだった。胸くそが悪くなった。まるで…。

「まるで…」マイ・ランはつぶやいた。

幻視の中で、現実にも目の前にいるプリティッシュとチエコ人の魔法使いが自分の言葉に耳を澄ませているけはいがした。思わず声に出して言ってしまったのだ。

「…大きな、鶏小屋のよう」マイ・ランは言った。

一人の、幻の女が、何事か叫びながら、厨房へ続いている廊下を走り出した。直感があった。

「こつちです」マイ・ランはその方向を指さした。

二人の男は、若い魔女の両脇を抱えるようにして、その方向へと誘導した。厨房に、地下のワインセラーの入り口があるのだ。

ウイズ・プリティッシュは電子精霊^{エアリエル}に指で合図して、数メートル先行させた。ブービートラップ化された召還獣の可能性を考慮したのだ。彼はさらにヤロシクに向かって手のひらを広げ、さっと窓を拭くような動作をした。三人を取り囲むようにレベルEの遮蔽魔法

をかける、という合図である。

ところが、ステパン・ヤロシクはちらりと彼を見たが何もしなかった。プリティッシュは、自分で透明な遮蔽フィールドを展開した。彼らはワインセラーに降りた。

幻の女は、ワインが並んでいる棚の向こう、煉瓦の壁に吸い込まれるように消失した。マイ・ランは、はっと息をのんだ。ごく、単純なことなのだ。

マイ・ランはその壁に、人差し指で触れてみた。軽い抵抗を感じた後に、指が壁にめり込んだ。柔らかく、なま暖かい感触があった。彼女は思わず指を引っ込めた。透明な粘液のようなものが、指先に付着している。

その感触が、^{ヴァンション}幻視から彼女を現実に戻した。

「…だいじょうぶか？」ウイズ・プリティッシュが背後から声をかけた。

「え？ ええ。…この壁は生きています」マイ・ランは言った。

「なんだって？」プリティッシュは言った。

「生きてるんです。『彼』に召還されたんですよ。…煉瓦の壁そっくりの生き物として」マイ・ランは言った。

プリティッシュは、手を伸ばし、壁に触れてみた。冷たく、堅い煉瓦の感触があった。力を込めて押してみる。何も起きなかった。手のひらでばんばんと叩いてみる。何も起きない。プリティッシュは、マイ・ランを見た。

「…え？」そんなはずはなかった。マイ・ランは手を伸ばした。壁に触れる。すると、さっきまで煉瓦の壁だったものが、ぐにやりと歪んだ。手首の先までずぶずぶと入っていく。マイ・ランは手の先が乾いた空気に晒されるのを感じた。壁のような生物の厚みは二十センチといったところだろう。

「女性しか通さない生きた壁」というわけか「ヤロシクの声がした。」「わたし、行きます」マイ・ランは躊躇することなく言った。

「待て、危険だ」プリティッシュは言った。

「殺せばいい」ヤロシクは言った。

「だめよ、ステパン。こいつの命自体が何かのトラップかもしれない。だいじょうぶ」わたしは、『上級魔女』なのだ。マイ・ランは、プリティッシュを見つめた。ほの明かりの下で、ウィザードは心配げに彼女を見ていた。

「行きます」マイ・ランは繰り返した。

「気をつけるんだ。何かあれば君の最大レベルの遮蔽魔法を使え。

この屋敷が壊れてもかまわん」プリティッシュは言った。

「わかりました」マイ・ランはそう答えると、身体全体を包む遮蔽フィールドを張りながら生きた壁を通り抜けた。その時、プリティッシュは小さな精霊をベトナム人の魔女の肩にくっつけた。魔女が通り抜けたあと、それはただの煉瓦の壁に戻った。

「…見えますか？ …マイ・ロード？」マイ・ランのささやき声が聞こえた。

プリティッシュの目の前に、液晶ディスプレイのように平たくなつて、勇敢な上級魔女の肩越しの映像をスクープしている電子精霊^{エレクトロニクス}が浮かんでいた。通路のようなものが映っている。動体レーダーが彼女の周囲を監視している。彼女以外に動いているものはいない。

「ああ、だいじょうぶだ。われわれは他の入り口を探してみる。…無理をするな」生きた壁の向こうで、ゆっくりと歩いているマイ・ランに、ウイズ・プリティッシュの声がラジオのように聞こえてきた。

「はい」マイ・ランは答えた。

彼女は長い地下室の隠し通路を歩いていた。肩にいる精霊の光が、殺風景なむき出しのコンクリートの壁を照らし出している。

「…あ」

『どうした？』

「…いえ、ポスターが貼ってあるんです。壁に。いま映します」
マイ・ランは、肩の精霊が写しやすいうように、身体の向きを壁に向かつて変えた。

それは、『彼』が勤めていた『スミソニアン空想博物館』の、幼児入場者向けのポスターだった。「Welcome」というかわい口ゴの下に、漫画に出てくるような、緑色のドラゴンが、両肩に小さな子どもたちを乗せている写真が中央に配されている。その竜は、古いフォークソングに出てくる魔法のドラゴンそっくりに召還された生き物だった。

『それは彼が召還したものだ。…人気があつたんだよ』プリティッシュの声がした。

「…はあ」マイ・ランは答えた。自分の仕事の成果にしる、『ハールム』に張るようなポスターだとは思えなかった。

マイ・ランは『彼』の顔を思い浮かべた。会つたことはない。写真を見ただけだった。

世界魔法管理機構の最大の禁忌を犯した男のようには見えなかった。特徴のない、頭髮が薄くなった丸顔のユダヤ系の中年男性。これまでの生涯のうち半分を、このポスターのような無害な生き物を召還してきた男だった。

「引き続き、探索を続けます」彼女は言った。

再びゆつくりと暗い通路を歩き出した。

しばらく行くと通路は終わり、鉄製の扉が見えてきた。

「扉があります。…開けてみます」マイ・ランは言った。

プリティッシュが応答する前に、ベトナム人の魔女は、ドアの取っ手に手をかけて、思い切り引つ張った。

「…うっ」突然、マイ・ランは声をあげた。

『どうした！』

「だ、だいじょうぶです。…ひどい臭いが」マイ・ランは言った。

彼女は顔をしかめながら、真つ暗な部屋に入った。電子精霊エアリエルの光が部屋の内部をぼんやりと照らし出した。十メートル四方の、正方形に近い部屋の中に、鉄製の檻がいくつか置かれている。汚物と化学薬品が入り交じつたような悪臭は、その檻の中から漂ってくるようだった。

電灯のスイッチを探した。扉のすぐ脇の壁面を照らした。スイッチらしきものは、あつた。だが、スイッチはもろろん、内側の壁にっばいに、血痕とも汚物ともつかぬ茶褐色の液体が付着していた。乾いてこびりついている。

手袋をしてくれればよかった。どうしても素手でそれに触る気になれない。マイ・ランはふと思いつき、かすかな反撥魔法をスイッチに対してかけた。かちん、と音がして黒いスイッチが入った。だが、何も起きない。

彼女は一番手前にある檻の一つを覗き込んだ。

「…何かの生物の死体を発見しました。仰向けになって死んでいるようです。やや…腐敗しています」マイ・ランはつとめて冷静に言った。だが、心の中には激しい不快感が広がっていた。その生物は、けばけばしいピンク色のトカゲに見えた。身体の回りに、乾いた黒い糞らしき丸い物がいくつも転がっていた。

彼女は檻の中を全部見て回った。様々な生き物が中に入っていたが、みんな死んでいた。

部屋の奥に、ドアがあつた。

「…ドアがあります。入ってみます」マイ・ランはそう言うてから、しばらくウイズ・プリティッシュが応答しないことに気がついた。

「…ウイズ？ ウイズ？ …聞こえますか？」

「ああ、聞こえるよ」その声は言った。

「…人のけはいすらない。十数名もの女たちをどこへやったんだろっ？」壁の向こうで、地下室をくまなく調べながら、プリティッシュ

ユはヤロシクに向かって言った。

「どこへ行つたんでしようね？」ヤロシクは言った。

彼らは暗い厨房の中にいた。巨大、と喋っていいような冷蔵庫があった。厨房の壁面に埋め込まれていた。緑色のほのかな光で白っぽく見えたが、エンジ色の冷蔵庫だった。プリティッシュは、指を突き出し、軽い魔法をかけた。

冷蔵庫のドアが開いた。

「なんだ、これは？」拍子抜けしたような声で、プリティッシュはつぶやいた。女性のバラバラ死体まで予想していたかのようだった。

巨大な冷蔵庫の内部のほとんど全部を占めていたのは、チョコレートだった。それもアメリカのどこにでも売っているような、有名な銘柄のチョコレートの包みが、山のように突っ込んであったのだ。「いったい…こんなものを」プリティッシュは言った。

「食うんだよ！」プリティッシュの背後にいたステパン・ヤロシクは、プリティッシュの頭をつかみ、冷蔵庫の扉の角に思いきり叩きつけた。

「ぐわっ」不意をつかれたプリティッシュの顔が、卵の殻のようにひしゃげた。大柄なチエコ人の魔法使いは、ウイズ・プリティッシュがぐったりと動かなくなるまで、彼の頭を壁にぶつけた。プリティッシュの金髪が血でべつとりと濡れた。

ステパン・ヤロシクは、動かなくなつたウイズ・プリティッシュを見下ろした。ヤロシクの指に、抜けたプリティッシュの金髪が何本かからみついていた。手を振って、それを払い落としした。

「ウイズ？ ウイズ？ …聞こえますか？」

「ああ、聞こえるよ」ステパン・ヤロシクは、空中で平たくなっている精霊に、そう答えた。

「よかつた…何かあつたのかと思ひました」魔法女の声が言った。

「マイ・ラン」ステパン・ヤロシクは言った。

「なんででしょうか？ マイ・ロード」マイ・ランは答えた。

「奥の部屋には何がある？」

「たくさんのベッドがあります…。まるでゴミのためのようですが、彼女たちの寝室なんですよ。…すごい臭いです。…こんな、…許せない」

「女たちはいないのか？」

「…いません。影も形もありません」

「そうか…いま、生きた壁を通り抜ける方法を見つけた。そこで待機しててくれ。すぐにそちらへ行く」

「ああ…助かります！この部屋の様子を見ていたら神経がどうかなりそうでした。早く来てください」

「ああ、待っていてくれ」

「ゴミため」と呼んだその部屋で、若い上級魔法女は待っていた。近づいてくる足音がした。振り返ると、ウイズ・プリティッシュが立っていた。

「ステパンはどうしたんです？」マイ・ランは言った。

「ああ、彼は通り抜けられなかつたんだ。一定以上の魔力が必要らしい」金髪の若きウイザードは答えた。

「そうですか」マイ・ランは言った。

「…それにしても、ひどい臭いだね」プリティッシュは言った。

「ええ、ひどいですね。これは…人間の住むところじゃない」マイ・ランは言った。

「初恋の女性そっくりの女たちだったのに」プリティッシュは言った。

「ですってね。好きだつた女性にそっくりなのにこんな仕打ちができるなんて」

「本当は、愛してはいなかつたんじゃないかな…」そう言って、プリティッシュは、マイ・ランに一步近づいた。

「…？」

「…マイ・ラン。君は人を愛した事があるかい？」プリティッシュは、若い魔女の肩に手をかけて、そう言った。

「え？…突然、どうしたんですか？」

「君のような美しい女性に愛される男がうらやましいよ」プリティッシュは、その魔女の黒い髪を撫でながら言った。

「や、やめてください」

「マイ・ラン…」

「ほくは前から、君の事を愛しているんだ」プリティッシュは、その魔女を抱きしめた。マイ・ランはもがいた。

「やめて。お願い」

「いやだね」そう言って、プリティッシュはマイ・ランの唇に強引に自分の唇を重ねた。マイ・ランは彼を力なく引き離そうとした。

だが、抵抗はすぐにやんだ。マイ・ランは、プリティッシュの首に両腕を回して、自分から強く抱き寄せた。

プリティッシュは、ウィザードであることを示すマントの中から、片手で何かを取り出した。暗闇の中で、それだけが銀色に鈍く光っていた。包丁だった。

プリティッシュは、激しく自分の唇を求めてくる若い魔女の背中に、ゆっくりとその包丁を突き立てた。

「う…うぐっ」魔女は激しく抵抗した。

プリティッシュは片手でその魔女の喉を鷲掴みにして、もう一方の手で包丁をさらに深く突き刺した。

突然、マイ・ランの抵抗がやんだ。包丁が心臓に達したのだ。

プリティッシュは、ゆっくりとその魔女の死体を、乾いた汚物で汚れた床に横たえた。

端正な顔には何の表情も浮かんでいなかった。

「が、腕を組んで光の中から現れた。」

「ものすごく不愉快だわ！…あなたは女性をなんだと思ってるの！」

「グエン・ティ・マイ・ランが現れ、顔を真っ赤にして怒鳴った。」

「プリंकマン、馬鹿な抵抗をするな。あなたはこんなトリックで私たちを欺けると思っていたのか？」

「ウイズ・プリティッシュは言った。」

「いや、驚いた。…こんな事が出来るのか」フロリダ州警察の制服を着た警官たちが現れた。

「ごらんの通り、立派な『殺人未遂』の現行犯だ。…これで逮捕できるでしょう？」

ステパン・ヤロシクが警官の一人におどけて言った。

「プリंकマン、だまされていたのはあなたの方なんだ。われわれは、最初からあなたがあの別荘の天井に張り付いて待っていたのを知っていたんだ。誰かが最初に一人になるチャンスを待っていたのもね」

プリティッシュは、プリंकマンの別荘を背にして、そう言った。

「あなたが順番に殺したのは…よく見てみる」ヤロシクが言った。

プリティッシュの姿形をしたその人物は、さっき足下に横たえたばかりのベトナム人の魔女の死体を見下ろした。その死体は徐々に溶け出して、しまいには緑色のゼリーのようになった。

「あなたが殺したと思ってるのは、『エアリエル』なんだ。もう変身を解くんぞ」

プリंकマン、魔法で変身してはいけない。元に戻れなくなるぞ」

プリティッシュは言った。

その人物は、目の前に立つプリティッシュをにらみつけた。指先から白く長いかぎ爪が現れた。

「ぎやいいいいいっ」

突然、獣のような声をあげて、その人物はプリティッシュに飛びかかってきた。しかし、数メートル手前で、見えない壁にはじかれたように、アスファルト舗装の上に落ちた。

「どうしたんだ？ ブリンクマン？」プリティッシュはそう言った。「あああううううう」その人物が奇妙な叫び声をあげた。跪き、両手を地面につけていた。顔に深い亀裂が走っていた。

「え？」マイ・ランが思わず叫んだ。顔の半分以上の肉片が剥がれて地面にぼとりと落ちた。よく見ると、鼻にあたる部分から小さな手が出ていた。まるで赤子のように、空中を掴む仕草をしていた。ぼたっ。

比較的大きな音がして、今度は頭部の大部分が剥がれた。まるでマンガ映画かなにかのようだった。さっきまで一個の人間であったものが、まるで乳児サイズの肉片で組み立てられた立体パズルが崩壊するように、バラバラになっていくのだ。

その場にいた全員が、顔をしかめていた。

マイ・ランは吐き気をこらえていた。そうだったのだ！最後まであの男は、自分が召還した初恋の女に似た女を、人間扱いしていなかったのだ。そう思うと吐き気を上回る激しい怒りがわいてきた。

ぜんぶで十五人いた。

彼女たちは、プリティッシュの魔法によって本来のサイズに戻された。

マイ・ランは、夕闇があたりを包むまで、現場に佇んでいた。何かの救急車で運ばれて行った、まったく同じ顔をした十五名もの女性たちの、今後の人生の事を考えていた。

ステパン・ヤロシクは、ずっと不機嫌だった。まんまとはめたつもりが、時間稼ぎに利用されたのだ。

その後、ブリンクマンの逃走経路は州警察とFBIの協力もあって、意外に早く判明した。彼は、モロッコに逃走したのだ。

一九九五年、五月二十五日、メイジ級魔法使いフレデリック・ブ

リンクマンは、魔法管理機構により反社会的魔法使い、すなわち『ソールサラー』と認定された。

完